

石井忠雄・小川政弘作

戦争ドラマスペシャル「ただ真理を知る者のみ」

<前編>

木下ルツ子ナレーション わたしは 57 歳の主婦で、木下ルツ子と申します。今年も 8 月 15 日が巡ってまいりましたが、あの、日本があまりにも多くの犠牲を払った、いわゆる“15 年戦争”に敗れて、軍国主義にピリオドを打ったあの日から、もう 42 年の歳月が流れました。敗戦後の、今の若い方々には話しても分かっていただけないようなドン底の日々と、その後の繁栄の中を、私は無我夢中で生き抜いてきましたが、この日が来るたびに思い起こすことがあるのです。これからの日本に生きる若い方々のために、そのことをお話しておこうと思います。

(効果音) (空襲サイレン、爆弾音、機銃音など)

ナレーション あれは 1944 年、昭和 19 年、敗戦の 1 年前のことでした。日本は、そのころ、圧倒的な連合軍の反撃の前に、次々と占領地を奪い返され、日本本土も空襲にさらされるようになりました。そんなある日のこと、私が学校から帰ると――

ルツ子 ただいま。お母さん、どうしたの？

母 ルツ子かい？ お父さんが警察に連れていかれたんだよ。

ルツ子 え、お父さんが？ どうして？

母 分からないよ。訳を聞いても教えてくれないんだもの。

ルツ子 何これ?! お部屋の中メチャメチャじゃない。

母 家宅捜査だよ。お前の部屋も見ていったよ。

ルツ子 本当？ (オフ 部屋から)本当だわ。わたしの本もノートもない。

母 (せき込む)

ルツ子 お母さん、寝てなきゃダメよ。まだ病気よくなってないんだから。

母 大丈夫だよ。それより、お父さんところ、何か持って行ってあげなければ。着替えも何も持たずに出かけたから。

ルツ子 お母さん、わたしが行ってくる。お母さんは寝ていて。

母 悪いねえ。じゃ何か食べるものも少し持って行っておくれ。

ナレーション 私はその時、中学 2 年生でした。私の父は基督教の牧師でした。“鬼畜米英”を叫び、少しでも天皇制や戦争遂行に反対する思想を持っていると疑われた人々は、いやおうなしに特別高等警察、“特高”に検挙される時代でしたが、基督教は、敵性宗教として、格好の攻撃の的だったのです。

私は表に出て、警察のほうへ向かいました。すると、学校の友達で教会の礼拝にも来る中村一郎さんに出会いました。

中村一郎 やあ木下君。どこへ出かけるんだい？

ルツ子 ああ、中村さん。実は、父が今日警察に連れていかれたのよ。それで今からちよつと。

一郎 へえ、どうしてだい？ 何かやったの？ 君のお父さん、牧師だろう？

ルツ子 ええ。でもどうしてだか分からないのよね。それも聞いてみようと思うの。

一郎 そう。じゃあ僕も行ってあげるよ。僕の父は検事をやってるんだ。だから少しは顔が利くからね。

ルツ子 本当？ ありがとう。

ナレーション こうして私たちは、神田の警察署を尋ねました。

一郎 あの、ちょっと、特高主任の高橋さん、呼んでもらえます？

高橋主任 何の用かね？（一郎に気づく）ああ、中村検事の坊ちゃん。今日はなんですか？

一郎 ええ。実はここにいる木下さんのお父さんが、今日こちらに連れてこられたというんで、心配して一緒に来たんですよ。

高橋主任 木下？ あの牧師の木下かね？

ルツ子 父はなぜ捕まったのですか？ どんな悪いことをしたのですか？

高橋主任 中村検事の坊ちゃん。こんなことをしてはいけませんね。今、取り調べ中でね。何も言うことはできないんですよ。終わったら早く帰してあげるから、今日のところは帰ってください。

ルツ子 なんの容疑かも教えてもらえないのですか？

高橋主任 くだい！ この非国民が。お前たち、ヤソはな、日本の国策に逆らって、恐れ多くも大元帥閣下の大み心に従わず、「別に王がいる」などと言っておる国賊だ。いつまでもそんなことを言っていると、全員^{らう}にぶち込んでやるから、帰ったら皆にそう伝えておけ。中村君、君もこういう手合いにあまりかかわらないほうがいいんじゃないかな？

ナレーション 私は、突然のことに、父への差し入れを渡すのが精一杯で、そのまま帰宅しました。

母 どうだった？

ルツ子 何か、「非国民」とか、「天皇陛下のみ心に従わない国賊」とか言われたわ。天皇陛下って、神様のような人なの？

母 今、日本は、国を挙げて戦争をしているだろ？ その中で、それに逆らうような考えをする人がいると、何かと都合が悪いのだろうね。今、日本人の大部分は、天皇陛下を神様として拝んでいる。でも、この天地をつくられたまことの神様はただ一人。その神様が、いつか、わたしたちの信仰が正しいことを示してくださいよ。忍耐を持って、聖書のみ教えを守っていくことが、一番正しいのだよ。

ルツ子 でもお母さん、お父さんがいなくなって、教会どうするの？

母 そのことだけれどね。さっき、役員の中井さんや、橋本さんたちが来てね、「こ

んな時勢だから、わたしたちは教会を離れたい」と言ってきたんだよ。あの人たちが来なくなれば、教会に残るのは2、3人になってしまう。でも、あの人も大変なんだろうね。だから、「どうぞ心配なく」って言うておいたよ。

ルツ子 皆、冷たいのね。きっと父さんが捕まったので、そのとぼっちりを受けたくないんだね。

ナレーション それから数日後のことでした。

婦人会長 ごめんください。木下さんの奥様います？

母 はい、どなた様ですか？

婦人会長 私、町内の婦人会長をしています藤木と申します。

母 あ、これは。いつもお世話様です。それで、なんの用でしょうか？

婦人会長 このたび、ご主人様、大変でしたわね。それで、少しでもお力になればと思ひましてね。何か、ご主人は、「キリスト様以外は絶対に拝まない」って頑張っているんですけど、それで刑事さん方も、たいそうお困りになっていらっしゃるのか。ですから、あなたがたがこちらで神社を参拝なされば、警察の方々の心証もよくなって、ご主人様、早く帰していただけるんじゃないかしら？

母 会長さんは、それをどこからお聞きになりました？ わたしどもが警察に行っても教えてもらえないのです。

婦人会長 (慌てて)これは、うわさ、うわさですよ。でも、あなたがたにいつまでも頑固に「キリスト教だけしか礼拝しない」などと言っていると、同じ町内に住む者にとって迷惑なんです。こんな時勢なんですから、“長いものに巻かれろ”ですよ。ちょっと頭を下げれば済むことじゃないですか。

母 はい、皆様そうおっしゃってくださるんです。でもわたしたちは、天地を創造された神様を信じています。この神様につくられた人間は、たとえその国で最高のお方でも、神として礼拝することはできません。ですから、ご好意は感謝しますが、この聖書の真理に背くことはできないのです。

婦人会長 何を言っているんですか。今、日本は戦っているのです。国民が一丸にならなければ、鬼畜米英に勝てないのです。それを、真理だかなんだか知らないけど、外国の宗教にかぶれているあなた方は、日本人ではありません！

母 すみません。でもそれは…。(せき込む)

ルツ子 お母さん、お母さん、やめて！ もう休みましょう。あ、ほら、こんなにひどい熱よ。

ナレーション 私は、病人でありながら、自分の信念を貫いている母の姿に、心を打たれました。それが、大変な勇気が要ることだということは、子供心にもひしひしと伝わってきたのです。

それから数日後、学校でのことでした。

学校の先生 木下、すぐ家に帰りなさい。お父さんが亡くなったそうだ。

ルツ子 え?! お、お父さんが?

(音楽) (重苦しい響き)

ナレーション 父は、警察の床の上で、戸板に寄せられて冷たく横たわっていました。体中が紫色にはれ上がり、一目で拷問を受けたことが分かりました。

高橋主任 お嬢さん、誤解されては困るよ。お父さんは階段から落ちたんだ。死因は心臓マヒだ。

ルツ子 ではどうして体が紫色に?

高橋主任 それは大方、落ちる時にあちこち打ったからだろう。分かったらさっさと引き取った!

ルツ子 警察は、有無を言わせず、父を車に乗せました。

母 あなた、まあ、こんなになって…。どんなに苦しかったでしょうに。

ルツ子 警察の人たちってひどいのよ。お父さんをこんな目に遭わせておいて、心臓マヒだなんて。わたし、赦^{ゆる}せない! だれがこんなことをしたのか調べて、訴えてやるわ!

母 まあルツ子、お待ち。(せき)訴えるなんてよくないよ。お父さんはね、信仰を全うして召されたのよ。だからやめて。

ルツ子 どうして? 悪いのは警察のほうよ。イエス様を礼拝しているというだけで、裁判にもかけず殺すなんて。

母 違うよ。お父さんはね、決してそんなこと思ってやしないよ。

ルツ子 どうしてそんなこと分かるの?

母 お父さんの手を見てごらん。

ルツ子 あ、紙切れを握ってる。(読む)「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」お母さん、これ、どういうこと?

母 お父さんはね、警察の人たちを赦^{ゆる}していらしたのよ。

ルツ子 でも、わたしは赦さないわ。人を非国民呼ばわりしておいて、自分たちはもっとひどいことをしているなんて。

ナレーション 私はその足で、中村さんの家を訪ねました。

<中篇>

ナレーション 私は木の下ルツ子という、今年 57 歳の主婦ですが、再び巡ってきた 8 月 15 日、第二次大戦の敗戦記念日を前に、私のささやかな体験談をお話しております。私の父は基督教の牧師でしたが、戦争が次第に激しさを加えてまいりますと、基督教は、当時、敵として戦っていたアメリカやイギリスの宗教ということで、何かにつけて当局の攻撃的的にされるようになりました。・その最大の原因は、天皇を最高の権威、いわば“神”としてあがめ、その天皇の下

に国を挙げて戦争を遂行しようとしていた政府にとって、すべての人間の上にある創造主なる神、そしてみ子イエス・キリストの絶対的な主権を信じるキリスト教は、日本の“国体”、つまりは国の統治機構の根底を覆すような存在だったからです。

父はある日、とうとう特高に捕らえられ、拷問の末、殺されてしまいました。当時中学2年だった私は、どうしても父の死を納得できず、同級生の中村一郎さんのお父さんを訪ねました。一郎さんのお父さんは検事でした。

ルツ子 一郎さん。わたしの父、警察で殺されたのよ。わたし、だれがやったか知りたいの。あなたのお父さん、検事でしょう？ ちょっと調べてもらえないかしら。

一郎 いいよ。父は今、家にいるから、君、直接聞いてみたら？ 呼んでくるよ。

(効果音) (中村検事が入ってくるドアの開く音。)

中村検事 木下君というのは君かね？

ルツ子 おじさん、わたしの父のことで調べていただけないでしょうか？ 父は拷問で殺されたのです。

検事 君は、あの牧師さんのお嬢さんかね？

ルツ子 おじさん、お父さんを知っているのですか？

検事 実は、君のお父さんを調べたのは、わたしなんだ。

ルツ子 え?!

検事 確かに、少しは拷問をしたよ。そうでもしなければ、強情を張って、わたしらの言うことなど聞かないからね。でも拷問で死んだのではないよ。取り調べ中はまだ元気だった。

ルツ子 「強情を張った」とおっしゃいましたが、なんのことで父は強情を張ったんですか？

検事 天皇陛下のことだよ。陛下も一人の人間で、キリストの救いを受けなければ滅びてしまうなどと言うんだ。

ルツ子 そうじゃないんですか？

検事 “カエルの子はカエル”というが、君も相当なものだね。帝国憲法に「天皇は神聖にして侵すべからず」と書いてある。陛下の祖先は、^{たかまがはら}高天原に^{あまくだ}天下った神であられ、陛下は^{あらひとがみ}現人神であらせられる。われら日本国臣民は、その^{せきし}赤子で、天皇の大み心に従わねばならない。それなのに君らは、その上にキリストという神がいるなどと言っておる。キリストなど、アメリカ人の神だ。

ルツ子 おじさん。父は、その天皇の命令で殺されたのですか？ それはひどいではありませんか。自分の意にそわない者を捕らえ、なんの抵抗もできない者を拷問し、殺してしまうなんて。

検事 何を言うのだ。少し口が過ぎやしないか？ 一郎の友達だと思い、穏やかに話してやれば…。君、それ以上言うと、不敬罪で逮捕されるぞ。

ナレーション 結局私は、むなしい思いで岐路に着きました。と、途中で近所のおばさんが一。

おばさん ルッチャン、大変だよ。お母さんが、警察に連れていかれたんだよ。

ルツ子 え?! でも母は病人ですよ。

おばさん うん、お母さん、やつれきってそりゃかわいそうだったけどさ。“一体お母さんまで、何の罪で?”と思って聞いてみたんだよ。そしたら、「うるさい！」ってどなられちゃったけど、でもしきりと、「あの朝鮮人はどうした？」ってお母さんに聞いてみたいだよ。

ナレーション それを聞いて私は、とっさに「あ、李^イさんのことだ」と思いました。李明吉^{イ・ミンギル}さんは、父が牧師をしていた教会の執事をしていた方で、韓国の方でした。父も母も、そして教会の人も李さんと呼んでいましたが、外では、“伊藤^{めいきち}明吉”という日本名を名乗っていました。というのも、1910年、韓国を自分の領土に併合してしまった日本は、領土のみでなく、言葉も、氏名も、韓国の人々から奪い取り、日本式の名前を名乗り、日本語を使用することを強要したからです。およそ、その国の国民としての存在感を示し得るのは、住むべき「土地」と「氏名」と「言葉」です。生きながら、その民族の誇りを奪われた韓国の人々の怒りと悲しみは、どれほどだったでしょう。「わたしのことを本名で呼んでくださるのは、木下先生ご一家と、教会の皆さんだけだ」という時の李さんの顔は、本当に悲しそうでした。

(音楽) (ブリッジ 悲しみ)

ナレーション この李さんには、成美^{ソンミ}さんという、私と同じ年のお嬢さんがいました。偶然、私と同じクラスで、彼女も、外では成美^{なるみ}と名乗っていましたが、どこからともなく、彼女が韓国人だというわさが広まってしまいました。どうも出どころは、あのいつか家を訪れた、町内会の会長さんのようでした。

(効果音) (クラスのガヤ)

女子生徒 ちょっと、伊藤さん、あなた、本当は朝鮮人なんだって？

ルツ子 だれがそんなこと言ったの？ 伊藤さんは、名前だって成美^{なるみ}だし、生まれた時から日本に住んでるのよ。言葉だってちゃんと日本語話してるじゃない。

男子生徒 あれ、木下、肩持つ気か？ 知ってたぞ、おれ。伊藤の本名は李^イっていうんだろ？

ルツ子 だからどうだって言うの？ 何も悪いことしてないのに、そんなことでいじめなくたっていいでしょ。

女子生徒 木下さん。あんた、そうやって朝鮮人のことかばうなんて、やっぱり“アーメン”ね。

ルツ子 え？ どういうこと？

男子生徒 外国人をかばうのは、外国の神様信じてる人間のやることだってこと。お前ん

ちの父さんも、それで捕まったんだろ？

ルツ子 でもお父さん、何も悪いことしてないわ。

女子生徒 ウソ。お母さん言ったもん。木下さんとはヤソで、キリストが天皇様より偉いなんて恐ろしいこと信じてるから、絶対友達になっちゃダメだって。あんたんとこ、靖国にも拝みに行かないんでしょ？ わたしの兄も、和夫さんのおじさんも、お国のために死んで、神様としてあそこに祭られてんのよ。

ルツ子 戦争で亡くなった人たち、かわいそう。でも、いくらお国のために死んでも、それで神様になるんじゃない。

男子生徒 何？ お前、それでも日本人か！ 朝鮮人の肩持ったり、ヤソ信じたり、恥ずかしくないのか？

ナレーション そんなことが、つい先日、学校であったばかりでした。あの町内会の会長の申し出を母が断って依頼、町の人々の態度は目に見えて、そう、私たち子供にまでトゲトゲしくなっていたのです。日曜日の礼拝も、数えるほどの、いえ、ほんの数人の人たちで守らなければならなくなりました。それも、外では、どうも特高らしい、目つきの鋭い人が中をうかがっている中で、ひっそりと行われたのです。その、父の連れ去られた後の教会を、最後まで母を支えて守ってきた数人の中の一人が、あの李さんでした。

李 奥さん、ルツ子さん、わたし、先生や奥さんに今まで本当に、本当にお世話になった。先生いなかったら、わたし、今ごろどうなってたか分からない。先生は、わたしたち一家の面倒を見てくれただけでなく、わたしたちを“韓国人”として、李明吉^{イ・ミンギル}として扱ってくださった。今、わたしにできるご恩返しは、この教会守ること。先生が一所懸命建て上げた、このイエス・キリスト様の教会、守ること。たとえ最後の一人になっても、わたしたち、この教会、離れない。奥さんのそば、離れない。だから奥さん、ルツ子ちゃん、頑張るって。

母 李さん。…ありがとう。(涙ぐむ)

ナレーション ところがその時、大変なことが起こったのです。軍から命令が出て、まだ都内に残っている韓国人の男子は、強制的に東北の鉱山に連行されて、軍用機の原材料の採掘に従事させられる、というのです。従わない者は、裁判に欠けられて死刑にされるということでした。

母 李さん、逃げてください。ここに、夫がもしもの時に、と残してくれたお金があります。足しにはならないかもしれないけど、なんとしてでも門司まで行って、そこから、韓国行きの密航船に乗り込めば、お国に着けるでしょう。さ、早く！

李 奥さん。申し訳ありません。ご恩返しもできないまま…。いつか、きっと平和な日本になります。それまで、どうか、お元気で。

ナレーション こうして、李さん一家は、夜のやみの中に消えていきました。それが、あの人たちと出会った最後でした。2日後、期限になっても現れない李さんを迎えに

やってきた警察は、李さんが逃亡したのを知るや、一家を逃がした罪で母を連れていったのです。わたしは早速警察に駆けつけました。高橋主任は、相変わらず、「逮捕の理由は言えない。面会もできない」の一点張り。でも、1、2日で帰れるという言葉を慰めに、その日は帰ってきました。しかし、母が釈放されたのは、1週間後のことでした。その日から、本当に母は寝たきりになってしまいました。

母 ルツ子、検事さんを恨むんじゃないよ。イエス様は、もっと苦しい十字架を忍び、十字架につけた人々の罪をお赦しになったのよ。

ルツ子 お母さん…。

ナレーション そう言ったとき、もうわたしは何も言えませんでした。優しい母をこんな目に遭わせた目に見えない力に対する怒りと悔しさで、ただブルブル震えながら、かさかさになった母の細い手を握り締めていたのです。――

<後編>

ナレーション 年が明けて、1945年(昭和20年)になりました。空襲は次第に激しさを加え、学徒動員で学生は戦地に、婦女や中学生は勤労奉仕で工場などに駆り出され、小学生は親元を離れ田舎に疎開し出しました。食糧はいよいよ欠乏し、口にこそ出さなかったが、もう敗戦の日が近いことは、だれの目にも明らかでした。私も工場で働くことになりました。それは、3月9日のことでした。私は、その日、夜勤で、母を一人残し、勤めに出たのです。

男 空襲警報発令！ 空襲警報発令！

(効果音) (サイレンの音。爆弾が炸裂する音。)

ナレーション 私たちは、いつものように防空壕に入ると、空襲が終わるのを待ちました。すると、遅れて入ってきた友達が――

友達 ルツ子さん、あなたの家のほう、火の海よ。

ルツ子 え?! わたしの家には、母が一人で寝てるのよ。行かなくっちゃ。

友達 何言ってるの！ 今出ていったら、あなた、命ないわよ。

ルツ子 でも母が。行かせて！

ナレーション しかし、多くの友達に押さえられ、出ていけぬまま、私はまんじりともせず、夜を明かしました。翌朝、私は家の前に立っていました。家はすっかり焼け落ち、母の姿はありません。

ルツ子 お母さん…。

ナレーション 私は、母が寝ていたと思われるところを掘ってみました。すると、黒焦げになった遺体が見つかりました。その手には、表紙だけになった聖書がしっかりと握られていました。

ルツ子モノローグ お母さん、ごめんなさい。わたしが家にいたら…。そうよ、病身の母を取り調べ

さえしなかったら、母はまだ元気で一人で逃げられたのよ。ひどい。本当にひどい。なぜこんな怖い人々が多くなったの？ だれが日本をこんな国にしたの？（ワッと泣き崩れる）

ナレーション 家も両親も失った私は、沼津の伯母の家に身を寄せました。そして、あの 8 月 15 日、日本は敗戦を迎えたのです。天皇陛下は、ラジオで終戦の詔勅を発表しました。それから天皇は、自ら“人間宣言”をしました。「自分は人間であって、神ではない」と証言したのです。その数か月後、私は東京に戻り、自分の家の焼け跡に立っていました。辺りには、ぼつぼつバラックが建ち始めています。その時、後ろからだれかが私の肩をたたきました。

スミス 木下さん、わたしはあなたを探しましたよ。

ルツ子 スミス先生！ いつ日本に？

スミス 1か月前です。わたしは、追放になりアメリカに帰る前、ここであなたのご両親と一緒に伝道しました。それで、横浜に着いて、真っ先にここに来ました。木下さん、ご両親はどこにいますか？

ルツ子 父は、獄中で死に、母は空襲で死にました。

スミス …そうですか。木下さん、わたしの国を赦してください。とてもひどいことをしました。戦争がなければ、こんなことにならなかったのに。でも、戦争は、人の罪の結果です。この問題を解決するには、アメリカ人も、日本人も、一人一人が悔い改め、神様のもとにかえらなければなりません。わたしはそのために、もう一度日本人に仕えるため、帰ってきました。ルツ子さん、あなたは、私のために手伝ってくれませんか？

ナレーション その時から、わたしは、父母に代わって、スミス先生と日本人の救いのために働き始めました。多くの人々が教会に集まり、イエス様を信じました。その中に、あの中村検事の子供である一郎さんがいました。

ルツ子 一郎さんじゃない？

一郎 ルツ子さん。君はここで伝道していたのですか？ 僕は、君を探しました。僕は君におわびしなければなりません。父を、そして僕を赦してください。

ルツ子 赦すなんて。あなたもイエス様を信じたのでしょうか？ わたしもあなたと同じ、罪のある人間なのよ。で、お父さんは元気？

一郎 今、刑務所です。戦争犯罪人として。

ルツ子 そう…。それで、お父さんに会えるの？

一郎 いいや、会わせてもらえないんだ。

ルツ子 わたしも同じ経験があるわ。でもね、スミス先生に頼めばなんとかなるかもしれない。

ナレーション ちょうど、GHQ の上層部にスミス先生の知り合いがいて、その紹介で私と一郎さんは、お父さんに会うことができました。

(効果音) (鉄の扉が開く音)

中村検事 (驚いて) 一郎! どうしてここへ?

一郎 木下さんのおかげだよ。

中村 木下さん? ああ、あの牧師さんの。一郎がお世話になります。しかし、以前のことを思うと、立場が逆ですね。わたしは、あなたのお父さんを捕らえて、結果的には死に追いやった。でも、それは自分で正しいと思ってやったんだ。でも、多くの人々が、今は、「あの戦争は間違っていた。天皇は神でない」と言っている。もうわたしには、何が正しいのか、何が真理なのか、分からなくなったよ。今、君は、わたしのことをいい気味だと思っているだろうね。

ルツ子 いいえ、おじさん。わたしは、今のおじさんの姿を見て、悲しいです。なぜって、わたしはおじさんを愛していますもの。わたしだけでない。わたしの両親もそうでした。この紙を見てください。死んだ父が握っていたものです。

中村 (読む)「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」木下牧師は、わたしのことをそんなに考えてくれたのか。それを、わたしは…。

ルツ子 そうです。わたしたちの神様は、ご自分に背を向け、背き続ける人々を愛し、そのために一人子イエス様を十字架につけてくださったのです。父が書いたのは、イエス様が十字架で息を引き取られる前に言われたのと同じ言葉です。

中村 そう…。そうなのか。考えてみたら、わたしはあなたがたの信仰を何も知らないで、ただ憎み、痛めつけてきたんだねえ。わたしにとっては、天皇こそ万世一系の権威だった。この世に天皇以外の究極の真理があってはならなかったのだ。

一郎 お父さん。イエス様がね、自分を憎む者たちのために、命を捨ててくださったイエス様が、「わたしは道であり、真理であり、命である」と言われたんだ。

スミス 中村さん。本当の真理は、人を憎しみの奴隷にしません。人を、人殺しの道具に駆り立てたりしない。弱い者、苦しんでいる者を死に追いやったりはしない。真理は、人を自由にします。真理は愛そのものです!

ナレーション 私は、中村さんの手を取って、熱っぽく話すスミス先生の顔を、今も忘れることができません。あれから40年の歳月が流れました。もう時間がありませんが、中村検事は、獄中で、スミス先生が残した聖書を熱心に読み続けて、ついにキリストを信じました。そして、戦時中、自分が投獄した一人一人の方々の家族を訪ねて、手をついてわび、残された家族のために親身の世話をし、数年前に点に召されました。まくら元には、父の残したあの紙切れを挟んだ、読み古しの聖書があり、その表紙裏には、中村さんのお父さんの歌が残されていたそうです。

「暗やみに終の^{ついで}真実と^{まこと}出会いたり キリストの愛に触れたる我は」
その父の変わりようを見て、一郎さんは間もなく神学校に入って牧師になり、

お父様の遺志を継ぐべく、韓国への宣教師として遣わされました。戦前、自分の親が迫害した韓国の人々へ、キリストの福音で仕えることで、償いをするのだ、ということでした。

40年前、日本の多くの人々が、真理ならざるものを真理と信じ込み、過ちを犯しました。でも、だれが、二度とその過ちは繰り返さないと言えるでしょうか。ただ、まことの真理なるキリストを知る者のみが、そのために命を懸けることができるのではないか、そんな気がするのです。――

<完>